

# サオ語（台湾）における現場指示表現 —日本語との対照から—

新居田 純野

## 論文要旨

本稿では、現場における指示表現が、台湾中部の日月潭周辺に住むオーストロネシア語族に属するサオ族の言語サオ語ではどのように表現されるかについて考察を行った。日本語では現場指示における指示表現は、話し手と聞き手の関係から、近称、中称、遠称の区別がコソアによってなされるのであるが、サオ語では、話し手を基準とした、話し手からの遠近、つまり、近称、中称、遠称の区別に、その対象が見えるか見えないかという「可視・不可視」が付加されて、使用される指示詞が決められる。サオ語には名詞修飾の指示詞「この、その、あの」、指示代名詞「これ、それ、あれ」・「ここ、そこ、あそこ」、指示動詞「ここに～ある、そこに～ある、あそこに～ある」があるが、それぞれの指示詞を「可視・不可視」「遠・近」を基に分類し、それぞれの指示詞の持つ意味・機能について分析および体系化を試みた。

**キーワード**【サオ語 指示詞 現場指示 遠・近 可視・不可視】

## 1. はじめに

台湾中部の日月潭周辺に住むサオ族<sup>1)</sup>の言語サオ語<sup>2)</sup>はオーストロネシア語族に属する。サオ語における指示表現では、「遠いか、近いか」「見えるか、見えないか」ということを基準として指示表現がなされる。本稿では、これまでの調査で収集した指示表現に関する用例を可能な限り取り上げて指示表現に関する詳細な記述を試み、日本語の現場指示における指示表現と対照しながら、サオ語の現場指示における指示表現の特徴とその体系を提示することを試みる。

## 2. 日本語の指示表現

指示詞とは、ヒト、モノ、コトガラなどを指し示すときに使われるものである。日本語の指示詞は、近称（自称）、中称（対称）、遠称（他称）の三つに分かれている。そして、他の品詞に属する同じ語頭音節を持った指示語とともに、コソアドの体系をなしている。指示詞には、指すものが話の現場にある現場指示と、指すものが話の中に出てくる文脈指示がある。

現場指示では、話の現場にあるものを指すときに、そのものの名前の代わりに指示詞が使

われる。日本語の指示詞はコソアのいずれかで始まり、その後に統語的な役割をあらわす部分が続くという構造になっている。現場指示の指示詞には対立型と融合型の二つの用法がある。対立型は現場で話し手と聞き手が離れた位置にいるときであり、融合型は現場で話し手と聞き手が同じ位置にいる場合や聞き手がいけない場合である。対立型では、話し手の心理的なわばりはコ、聞き手の心理的なわばりはソ、それ以外はアで指す。融合型では、話し手と聞き手で「われわれ」という心理的なわばりをつくり、それをコで、話し手と聞き手から遠いものはアで、どちらでもないものはソで指す。

文脈指示の指示詞には、聞き手の存在が問題となる対話における文脈指示と聞き手の存在が問題とならない文章における文脈指示とがある。聞き手が存在する文脈指示では話し手と聞き手がともに直接知っているものはアで指し、そうでないものはソで指す。文章における文脈指示ではアはほとんど使われず（アは聞き手も知っているものしか使えないため、文章ではほとんど使われない）、コとソの使い分けが問題となる。

日本語のコソアドは文中での使用形式によって、次のように分類することができる。

**表 1 日本語の指示詞体系**

指示詞		近称（コ）	中称（ソ）	遠称（ア）	疑問称（ド）
＋名詞		この	その	あの	どの
		こんな	そんな	あんな	どんな
代 名 詞	もの	これ	それ	あれ	どれ
	ひと	こいつ	そいつ	あいつ	どいつ
	場所	ここ	そこ	あそこ	どこ
方向		こちら こっち	そちら そっち	あちら あっち	どちら どっち
副詞		こう こんなに	そう そんなに	ああ あんなに	どう どんなに

### 3. サオ語の指示表現

日本語のコソアでは、現場指示の「近称・中称・遠称」の基準が物理的な距離だけではなく心理的な領域（なわばりの意識）が大きく関係しているのに対し、サオ語の現場指示における指示表現は、話者がその指し示すものに触れるか触れないかという距離の遠近に、見えるか見えないかという要素が加わって使用される指示詞が異なる。また、実際に使われている指示表現をみると、話者によってさまざまな語彙がさまざまに使われていて、その使用には「ゆれ」もみられる。サオ語では、昔物語などを語り伝える時には、文脈指示における指示表現も見られるが、本稿では、サオ語の発話の中で最も重視する「今、ここで」認識して

いるできごとに対する発話における指示表現、つまり現場指示における疑問称を除いた指示表現について取り上げる。

### 3.1 先行研究

黄（2000）では指示表現について、表2のように提示している。

表2 サオ語の指示代名詞体系（黄 2000：88）

距離	可視／不可視	指示代名詞	意味
発話者に近い	見える	' izahay; ' inay	これ
発話者から少し離れている	見える	haya; ' izay	それ
発話者に遠い	見える／見えない	huya	あれ

（注： ' は glottal stop、日本語訳は筆者）

黄は、上の表の指示代名詞 'inay と 'izay は、場所の「ここ」と「そこ」を示すが、指示代名詞としても使用される、としている。

Blust（2003: 211 Deictics）では、それぞれの指示詞の語彙的意味は次のように説明されている。

- i-nay      here: this, these
- i-saháy    (most commonly heard as /i-say/) there (near distance, visible)
- i-zaháy    (i-saháy, i-zay)
- i-suhúy    (most commonly heard as /i-suy/) there (not near addressee)
- i-zuhuy    (i-suhúy)
- i-tusi      over there
- i-tantu    there, in that place
- i-utu      there, in that place
- haya      that (semi-distal deictic) ; that person/ those people
- huya      that (distal deictic)

（/huya/ と /i-suhúy/、/haya/ と /i-saháy/、/haya/ と /i-suhúy/ が共起する例も見られる。）

また、Wang（2004: 309）では、表3のように提示している。

これらの先行研究では、サオ語の指示詞体系を、「近称、中称、遠称」の三段階、および、「可視／不可視」から分類している。

本稿では、i-nay、i-say、i-suy、i-tusi を、新居田（2005）でも論じたように、「遠／近」と「可視／不可視」によって使い分けられる所在をあらわす指示動詞<sup>3)</sup>とした。ところで、サオ語の指示表現でもっとも重視されるのは「見えるか、見えないか」「近いのか、遠いか」ということである。日本語では、現場指示において対立型と融合型の二つの用法があるのに対し、サオ語では話し手、聞き手の関係から指示表現がなされるのではなく、話し手から触れ

表 3 DEICTICS IN THAO (TABLE 5. 7)

Distance (遠近) ／ visible or nonvisible (可視・不可視)		Noun (名詞)		Preposition (前置詞)	Plain intransitive locative verb (場所動詞自動詞)	Meaning (意味)	
Proximal (近い)				inay	inay	this/these, here	
Semi	Short (近い)			haya	iza (ha) y	iutu	that/those, there
distal	Intermediate					isa (ha) y	
(中間)	(中間)						
Distal (遠い)				isu (hu) y	isu (hu) y	that/those over there	
				itusi, itantu	itusi, itantu		
		Non visible (不可視)		huya	izu (hu) y		

(注: 日本語訳は筆者)

ることのできる近さか、あるいは、触れることのできない距離か、ということで指示形容詞、指示代名詞が使い分けられ、それに「見えるか、見えないか」という要素が加わって指示表現がなされるのである。また、指示動詞では、近称、中称の線引きは話者によってさまざまであり、日本語のような心理的な領域が指示表現に関わっていないという感触を得ているが、現段階までの調査では断言するまでの確証は得られなかった。本稿では、これらサオ語における指示表現について筆者調査の用例をもとに考察を行っていく。

また、Blust (2003)、Wang (2004) で取り上げられている、i-utu と i-tantu についてであるが、以下のような理由から、今回現場における指示詞として取り上げなかった。

#### (i) utu

utu に関しては、筆者は (1) (2) のような用例を調査から得ているが、一度話題に上がった場所を指し示す場合に使われることから、i-utu は文脈指示的であると解釈した。

- (1) yaku miaqay i-utu m-riqaz i-zay kawi pun-tunuq-in thithu  
1 単主 ずっと そこ 見る -AF 指 (その) 樹 倒れる -CAUS-PF 3 単主  
私は、彼がその木を倒すまで、ずっとそこで見ていた。

- (2) Q: uka i-utu a lhqaribush?  
NEG そこ 連 生き物

(Lalu 島<sup>4)</sup> のことを話題にしている、その島を指して i-utu 「そこ」について、会話の中で質問している。) 「そこ (Lalu 島) には生き物がないんですか。」

- A: uka sa lhqaribush sa i-Lalu  
NEG 助 生き物 助 Lalu 島-場  
ラルー島には生き物がない。



① haya

(7) haya wa patashan ti Kilash ?

指 連 本 敬 キラシ

この本はキラシさんのですか。

(8) haya wa binanau'az yanan sa azazak

指 連 女 持つ 助 子ども

この女性には子どもがいる。

② i-nay

(9) yaku i-nay waqrath s-m-apuk rusaw

1 単主 指 川 捕まえる 魚

この川でさかなを捕まえている。

b. 可視・中称

haya は基本的には手に触れることのできる近さにあるものであるが、触れることのできるほど近くではないが、目に見える範囲で指し示すことのできる場合、haya が使われる。

huya

(10) huya wa binanau'az yanan sa azazak

指 連 女 持つ 助 子ども

あの女性には子どもがいる。

(11) huya wa atu nak a atu

指 助 犬 1 単属 連 犬

あの犬は私の犬だ。

c. 可視・遠称

huya は見える範囲で少し離れているところに使われるが、かなり遠いところにあっても、見えるものであれば huya が使用できる。

huya

次の用例は、話者から 30m くらい離れている高台にある家を指し示しての発話である。

(12) huya wa taun Ali ya taun

指 連 家 アリ 連 家

あの家はアリの家だ。

3.2.2 指示代名詞（これ、それ、あれ—モノ）

ものを指し示す「これ、それ、あれ」は、形容詞的指示詞「この、その、あの」と同じように、haya、huya が使われる場合が多いが、i-nay を使う場合もあり、その場合は、i-nay の持つ方向性が加わり、「こっちにあるもの」を意味するようである。名詞を修飾する指示詞

と同じ指示詞が代名詞として使用される。指示代名詞としての haya は、触れることのできる近さにあるものを指し示す。

#### d. 可視・近称

可視・近称に使用される指示代名詞は haya や i-nay で、指示者の近くにあるものを指し示す場合に使われる。また、haya と i-nay が一緒に使われる場合 (16) (17) もある。

##### ① haya

(13) haya tamuhun

指 帽子

これは帽子だ。

(14) haya sa nak

指 助 1 単属

これは私のだ。

##### ② i-nay

haya と置き換えることが可能である。

(15) i-nay nak a tamuhun

指 1 単属 連 帽子

これは私の帽子だ。

被調査者によれば、もしも本に触れて、本を指し示す場合の発話であれば「haya patashan (これは本だ)」になり、本に触れずに指し示す場合は「haya i-nay patashan (こっちが本だ)」になるということであった。これは、i-nay の持つ方向性が関係しているのではないかと思われる。

(16) haya i-nay pangka wa fafaw patashan

指 指 机 連 上 本

こっちの机の上に本がある。【見えるが触れてはいない】

(17) haya i-nay sa pash-tubu-an

指 指 助 トイレ

こっちがトイレだ。

#### e. 可視・中称

可視・中称の指示代名詞は huya が使われるが、形容詞的指示詞と同様、huya は、部屋の中の離れたところにあるものやちょっと見えにくいところにあるものも指することができるようである。

##### huya

(18) huya sa pash-tubu-an

指 助 トイレ あれがトイレだ。

#### f. 可視・遠称

遠いところで見えて指し示すという場合は、huya が使われる。遠くに干してある話者自身の布団を指して次のような発話を得られた。あるいは、(20) のように「1. 不可視・遠称」のところで提示する「向こうのほう」を表す mangkathi が huya に共起してある程度距離のあるところにあるものを指し示すことでも表現できるようである。

(19) huya nak a pinuqrum

指 1 単属 連 布団

あれは私の布団だ。

(20) huya mangkathi nak a taun

指 向こう 1 単属 連 家

あれは私の家だ。

また、指し示す人やものが見えない場合、つまり、話題とする人やものがどこにいる／あるのかわからないという場合は、(21) (22) のように、その人の名前や「誰々のコップ」のように具体的に提示して発話される。

(21) i-ntua ti Kilash?

どこ 敬 キラシ

キラシさんはどこですか。

(22) i-ntua s Kilash a baruku?

どこ 助 キラシ 連 コップ

キラシさんのコップはどこですか。

#### 3.2.3 指示代名詞（ここ、そこ、あそこーバシヨ）

「ここ、そこ、あそこ」などの場所を指し示す指示代名詞は、可視・不可視、遠・近によって使い分けがかなりはつきりしており、i-nay、i-say、i-suy がそれぞれの範囲を分担して受け持っている。i-say は i-sahay、i-zay と、i-suy は i-suhuy、i-zuy と発音されることもあるが、被調査者によるとそれぞれ同じものであるということである。

また、i-nay、i-say、i-suy を場所を表す指示代名詞ととらえるのか、指示動詞ととらえるのかという判断は難しいところである。本稿では、場所を示す指示代名詞か指示動詞かの判断は語順を目安としたが、これに関してはさらに用例を集めて再考する必要があるだろう。

〈場所を示す指示代名詞〉 所在物＋指示代名詞 用例：(23) (24) (25) (26)

所在物は、ここ／そこ／あそこ だ。

〈指示動詞〉 指示動詞＋所在物 用例：(31) (32) (33) (38) (40)

ここに／そこに／あそこに、所在物 がある。

#### g. 可視・近称



見える近い場所を指し示す指示代名詞は i-nay である。

i-nay

(23) nak a taun i-nay

1 単属 連 家 指

私の家はここだ。

(24) la-piza wa thaw maniun i-nay?

いくつ 連 人 2 複 指

あなたたちは何人ここですか。（ここに何人いますか。）

(25) la-rima wa thaw i-nay

五 連 人 指

5 人はここだ。

h. 可視・中称

それほど発話者から離れていなくて、見える場所を指し示す場合、どのくらいの距離がそれほど近くもなく遠くないのかということは、発話者によってさまざまである。次の用例は、被調査者および筆者が家の中にいて調査をしているときに、その場所から表にいる犬が見え、その犬を指して、「犬が家の前で寝ている」という発話がなされたときのものである。距離にすれば3メートルぐらいである。

i-say

(26) atu i-say nak a taun a tana-muqtha

犬 指 2 単属 連 家 連 前

犬は家の前のそこだ。

i. 可視・遠称

上記の i-say に対して、用例 (27) の i-suy は、15 メートルぐらい離れているところにある木を指しての発話である。鳥がいるところまではっきり見えるかどうか微妙なところであるが、指し示す木は話し手にも聞き手にも見える位置にあった。

i-suy

(27) rumfaz i-suy ribush pana pangqa

鳥 指 樹 枝 休む

鳥はあその木の枝にいる。

j. 不可視・近称

近くて見えない場所という設定がうまくできなかったため、ここでの用例は得られなかった。

k. 不可視・中称

近くて見えない、という設定がうまくできなかったのに対し、「少し離れた距離にあるが、

陰になっていて、はっきりとは見えない場所にある家」という設定で、(28) のような発話を得た。

i-suy

(28) nak        a    taun i-suy

1 単属   連   家   指

私の家はあっちだ。

また、haya と i-nay と同様、huya と i-suy が一緒に使われる場合もある。これは被調査者が飼っている猪が、3メートルくらい離れた入り口の戸の陰にいて見えなかったときの質問に対する答えである。

(29) Q: i-ntua   sa        mihu        a        wazish?

どこ   助        2 単属        連        猪

あなたの猪はどこですか。【見えないので質問】

A: nak        a        wazish    i-suy    huya

1 単属        連        猪        指        指

私の猪はそっちです。【そんなに遠くないが見えないところにいる】

#### 1. 不可視・遠称

ここで取り上げた i-mangkathi は Blust (2003: 560) では、'on the other side, on the far side' となっていて、これを指示詞として扱っているのかどうかは疑問ではあるが、日本語で言えば「向こうのほう」という意味合いになるものである。

i-mangkathi

(30) nak        a        taun    i-mangkathi

1 単属        連        家        向こう

私の家は向こうのほうだ。【遠くて見えない】

#### 3.2.4 指示動詞（ここに～ある、そこに～ある、あそこに～ある）

新居田 (2005) では、「サオ語の指示動詞は話し手に近くて見えるものの所在を表す場合は i-nay（ここにある）、話し手から少し離れていて見えるものの所在を表す場合は i-say（そこにある）、少し離れていて何かの陰などで見えないものの所在やかなり離れているが見えるものの所在をあらわす場合は i-suy（あそこにある）、見えない遠いところにあるものの所在を表す場合は i-tusi（あそこにある）」というように使い分けられる。」として、考察を行った。本稿でもこの分類に従う。

#### m. 可視・近称

近くにあって見えるものの所在を表すには、指示動詞 i-nay が使われる。

i-nay

(31) Q: i-ntua sa pash-tubu-an?

どこ 助 トイレ

トイレはどこですか。

A: i-nay sa pash-tubu-an.

指 助 トイレ

ここにあります。【見える】

n. 可視・中称

中称であっても、見えるか、見えないかによって、使用する指示動詞が異なる。見えれば i-say、見えなければ、i-suy となる。この i-suy は、見えるがかなり離れたところにあるものに対しても使われる。

i-say

(32) Q: i-ntua sa pash-tubu-an?

どこ 助 トイレ

トイレはどこですか。

A: i-say sa pash-tubu-an.

指 助 トイレ

そこにあります。【見える】

o. 可視・遠称

i-suy

(33) i-suy nak a taun.

指 1 単属 連 家

私の家はあそこにあります。【遠いが見える】

p. 不可視・近称

たとえば、蛇が近くにいて気配がするが見えない場合、i-nay に所有動詞の yanan や存在動詞の itia を共起させると、近くで見えないことを表せるようであるが、そのほかにも (37) のようにさまざまに工夫して発話者は表現した。

(34) yanan qlhuran i-nay

所有動詞 蛇 指

(見えないが) ここに蛇がいる。

(35) itia i-nay qlhuran

存在動詞 指 蛇

(見えないが) ここに蛇がいる。

(36) Q: intua patashan?

どこ 本 どこに本がありますか。

A: i-nay patashan kakadu

指 本 引き出し

引き出しの中にあります。

(37) i-sahay patashan / ki-nay patashan / i-say i-tmaz patashan

指 本 そばにある 本 指 中 (引き出しなどの) 本

ここに本がある。

q. 不可視・中称

i-suy

(38) Q: i-ntua sa pash-tubu-an?

どこ 助 トイレ

トイレはどこですか。

A: i-suy pash-tubu-an.

指 トイレ

トイレはあそこにあります。【少し遠くて、見えない】

見えないが、いすの上に自分の帽子があることは認識していて、その帽子が話題になったとき、i-suy と utu が使われた。

(39) i-suy pangka wa faw nak a tamuhun utu

指 椅子 連 上 1 単属 連 帽子 そこ

椅子の上に私の帽子がある。

r. 不可視・遠称

とても見えないであろう、遠いところ (たとえば、台湾で日本のことを話題にした場合) にあるものに対しては、i-tusi が使われる。

i-tusi

(40) i-tusi nak a taun Taipak.

指 1 単属 連 家 台北

私の家は台北です。【遠くて、見えない】

## 4. まとめ

ここでは、3.2 でみてきたサオ語の現場指示における指示詞をまとめて、表に示しておく。この表から、サオ語の指示詞は形容詞的指示詞、指示代名詞、指示動詞のどれも、「可視・不可視」と「遠・近」によって、使われる指示詞が異なることがわかる。しかし、同じ指示詞でも、可視の場合に用いられったり、不可視の場合に用いられったりする指示詞もある。それは、指示代名詞 (バシヨ)、指示動詞に使用される i-suy である。この指示詞は、中称に用い

られる場合は不可視になるが、遠称に用いられる場合は可視になる。

また、形容詞的指示詞の「この、その、あの」や、指示代名詞（モノ）では、不可視の用例は得られなかった。

表 4 サオ語指示表現の分類

品詞	可視・不可視	近称	中称	遠称
形容詞的指示詞 この、その、あの	可視	a. ① haya ② i-nay	b. huya	c. huya
指示代名詞（モノ） これ、それ、あれ	可視	d. ① haya ② i-nay	e. huya	f. huya
指示代名詞（バシヨ） ここ、そこ、あそこ (注 1)	可視	g. i-nay	h. i-say	i. i-suy
	不可視	j. ? (注 2)	k. i-suy	l. i-mangkathi
指示動詞 ここに～ある そこに～ある あそこに～ある	可視	m. i-nay	n. i-say	o. i-suy
	不可視	p. さまざまな表現がなされ、一定せず。	q. i-suy	r. i-tusi

(注 1) 「ここで、ここに」などのように、副詞的にも使用されるが、本稿では指示代名詞としておく。

(注 2) ?は、筆者の調査では、用例が十分得られなかったものである。?のところは、筆者自身は、表現されにくいと考えているが、「絶対的」ではない。

先行研究の Wang (2004) 表 3 における指示詞の分類と、筆者の表 4 における指示詞の分類との違いを以下にあげておく。

[I] Wang では「i-su (hu) y は Visible・Distal」としているのに対し、本稿では「不可視・中称、あるいは、可視・遠称を指示する」とした。

[II] Wang では「i-zu (hu) y、i-za (ha) y を独立した deictics (Noun)」と分類しているのに対し、本稿では「i-sahay、i-say、i-zahay、i-zay と、i-suhuy、i-suy、i-zuhuy、i-zuy を、それぞれ異形態」として扱った。

[III] Wang では「Visible・proximal に相当する指示代名詞はない」としているが、本稿では「可視・近称に haya、i-nay を分類し、さらに、haya は手で触れることのできるほどの近さ」とした。

[IV] Wang では「Visible/Non visible・Distal に huya を分類」しているが、本稿では「huya を可視・中称、および、可視・遠称」として、haya が手で触れることのできる近距離のものを指し示すのに対し、huya は haya の指し示す範囲以外とした。

[V] Wang では「iutu を Visible・Semi distal-Short の Plain intransitive locative verb」としているが、本稿では「i-utu は文脈指示に使われる指示詞」として現場における指示詞としては分類しなかった。

[VI] Wang では「i-tantu と i-tusi を Non visible・Disatal の Preposition/Plain intransitive locative verb」しているが、本稿では「i-tantu は指示詞と扱えるかどうか不明、i-tusi のみを不可視・遠称の指示動詞」とした。

[VII] Wang では、「Non visible は Distal のみ」になっているが、本稿では「中称、遠称のどちらにも可視と不可視がある」とした。

次にサオ語の個々の指示詞について、その特徴をまとめておく。

表 5 の①～⑦の用例<sup>6)</sup>を以下に示す。

表 5 サオ語指示詞の基本的な語彙的意味とその使用

① haya 「こ」 この、これ	距離が近い。手に触れることのできる距離で見えるものに使用される。 形容詞的指示詞 haya wa+ 名詞 (この N)、指示代名詞 (モノ、バシヨ) haya i-nay (こっち-近いが、触れないで指し示す場合) (用例 (16) (17))
② huya 「そ」 その、それ、 あの、あれ、あそこ	haya が触れることのできるものに対して使用されるのに対し、見えるが触れることのできないものを指し示し、かなり遠いところにあるものにも使用できる。 形容詞的指示詞 huya wa+ 名詞 (その N、あの N)、指示代名詞 (モノ、バシヨ) i-suy huya (あっち) (用例 (29)) そんなに遠くないが見えないときに使用される。
③ i-nay 「こ」 この、これ、 ここ、ここに～ある	距離が近いものや場所を表す。 形容詞的指示詞 i-nay a+ 名詞 (この N)、指示代名詞 (モノ、バシヨ)、 指示動詞
④ i-say 「そ」 そこ、そこに～ある	i-nay より離れているが、見える場所。 指示代名詞 (バシヨ)、指示動詞
⑤ i-suy 「そ、あ」 そこ／あそこ、 そこ／あそこに～ある	近いが見えない場所と、遠くでも見える場所。 指示代名詞 (バシヨ)、指示動詞
⑥ i-tusi 「あ」 あそこに～ある	遠くで見えない場所。あるいは、たとえば台湾にいて日本のことを言う場合のように、はるか遠くの国も指せる。指示動詞
⑦ i-mangkathi 「あ」 むこう	向こう側。距離がとても遠い。離れているが、見える場合にも使用される。 指示代名詞 (バシヨ)

#### ① haya

(41) haya wa binanau'az yanan sa azazak.

指 連 女 持つ 助 子ども

今、目の前にいるこの女性には子どもがいる。

(42) haya nak a patashan

指 1 単属 連 本 これは私の本だ。

#### ② huya

(43) huya wa patashan Kilash a patashan

指 連 本 キラシ 連 本 その本はキラシの本だ。

- (44) huya sa pash-tubun-an  
指 助 トイレ それはトイレだ。

③ i-nay

- (45) mihu a azazak i-nay nak a taun  
2 単属 連 子ども 指 1 単属 連 家  
あなたの子どもは、ここの私の家にいる。（私とあなたは今「私の家」にいる）
- (46) i-nay yaku ya malhus  
指 1 単主 もし 寝る  
（寝るなら）私はここで寝る。

④ i-say

- (47) patashan i-say pangka wa faw  
本 指 机 連 上  
本はそこの机の上だ。（今、目の前に机がある）
- (48) atu i-say nak a taun a tana-muqtha malhus  
犬 指 1 単属 連 家 連 前 寝る  
犬は私の家の前で寝ている。（私と聞き手は私の家にいる）

⑤ i-suy

- (49) i-suy yaku ya malhus ribush a prug  
指 1 単主 もし 寝る 樹 連 土地  
あそこの木の下で寝る。（今いる場所から木まで離れている）【見える】
- (50) i-suy painan  
指 多分  
多分そこだ。【見えない】

⑥ i-tusi

- (51) nak a taun i-tusi Taipak  
1 単属 連 家 指 台北  
私の家は台北だ。（話の現場から台北まで遠い）
- (52) mihu a azazak i-tusi nak a taun  
2 単属 連 子ども 指 1 単属 連 家  
「あなたの子どもは私の家にいます」と、道で会って話す。  
（話の現場から「私の家」まで遠い）

⑦ i-mangkathi

- (53) nak a taun i-mangkathi  
1 単属 連 家 向こう 私の家は向こうだ。

(54) Lalu i-mangkathi

ラルー島 向こう

ラルー島は向こう側だ。(湖の真ん中にある島で、話しているのは話し手の家)

以上から、日本語では、話し手と聞き手の関係から、近称、中称、遠称の区別がコソアによってなされるのであるが、サオ語では、話し手を基準とした、話し手からの「遠近」および、その対象が「見えるか見えないか」という「可視・不可視」によって指示詞が異なることがわかる。しかし、実際のサオ語の発話においては、あまり指示詞を使用せず、固有名詞を繰り返して使う傾向があることを書き添えておく。

## 5. おわりに

サオ語の指示詞は、指し示すものが話の現場にある場合は、話し手からの「空間的距離の遠・近」「可視・不可視」の違いによって使い分けられている。しかし、話し手が指し示す対象の名前を知っている場合は、指示詞や代名詞はあまり使われず、その固有名詞を用いる傾向がみられた。つまり、指示対象そのものが明確に存在している場合は指示詞を用いない。それは、サオ語では、必ず、今、ここで、目にしているコトに関する会話が中心になされるため、人が話題になるときは必ずその人の名前を用いることが原則であり、それが自然な会話になるのである。

このことに関連するのだが、「彼、彼女」という三人称を用いて表現してもらおうとすると、被調査者が言いにくそうにするため、特別な意図がない限りは、第三者は固有名詞を用いて調査することにしている。そのため、三人称代名詞の用例が得にくくなり、その点に関して用例が十分ではなかった。今後、この点をどのように扱っていくかは課題である。

また、本稿では扱わなかったが、文脈指示<sup>7)</sup>における指示詞の使用について最後に少し触れておく。たとえば、サオ語において、話の現場に指し示すものがない場合の指示詞の使われ方であるが、指示対象が話し手と聞き手の経験の中にあるかどうかに関係なく時間的空間的距離の「遠・近」によって使い分けられるようである。さらに、形容詞的指示詞に接続する名詞(人、場所、こと、ものなどの名詞)や、場所を指し示す指示代名詞の表示するものが明確な場合、指示詞を含む語を省略するか、或いは、その名詞や場所を繰り返す<sup>8)</sup>傾向がある。たとえば、すでに話題に出た人をあらためて指し示す場合、日本語では「その人」「彼」「彼女」など指示詞や三人称代名詞が使われるが、サオ語では、指示対象の名前などが明確な場合は、すでに一度登場した人物であっても、三人称代名詞はあまり用いられず、名前を繰り返すことが多い。

このような文脈指示についても、さらに詳しい調査を進めていかなければならないと考え



ている。

調査をしていて、非常に興味深いと感じたことは、被調査者にこちらが提示した文をサオ語に置き換えてもらうとき、被調査者は、調査者に対し「その人は、そのものは、見えるかどうか」ということを確認する場合が多いことである。このことから、「見えるかどうか」ということは、サオ語による言語表現において、非常に重要な要素であると実感している。

また、ここで指示動詞として取り上げた i-nay、i-say、i-suy、i-tusi、i-mangkathi は、どれも、nay、say、suy、tusi、mangkathi（これらは接辞なしでは用いられない）に場所接辞の i- がついたもので、ほかにもさまざまな接辞がついて、たとえば、nay を例にすれば、ki-nay 「隣に」、mu-nay 「来る」、maka-nay 「ここに来る」、などというように、副詞的にも、動詞としても使用される。本稿では、これまでの先行研究を参考に、筆者自身の調査用例を分析して、指示詞の体系というものを提示したが、実際には、このようなさまざまな機能をもたらず接辞との関係をも含めて、今後さらに考察を行っていかねばならないと考えている。

## 参考文献

（日本語文献）

庵功雄（1995）「ソノ N とソレー指示代名詞の分解可能性―」『日本語類義表現の文法』（下）：632-637. くろしお出版

庵功雄、他（2000）『初級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク

高橋太郎（1956）「『場面』と『場』」『国語国文』25-9: 53-61. 京都大学文学部国語国文学研究

（金水敏・田窪行則編（1992）『指示詞』:38-46. 再録 ひつじ書房

高橋太郎（1996）「『“場面”と“場”』の再確認」『日本語文法の諸問題』ひつじ書房

高橋太郎、他（2005）『日本語の文法』ひつじ書房

寺村秀夫（1984）『日本語のシンタクスと意味 第Ⅱ巻』くろしお出版

寺村秀夫（1991）『日本語のシンタクスと意味 第Ⅲ巻』くろしお出版

新居田純野（2004）「サオ語（台湾中部）における存在・所有・所在の表現」『日本言語学会第128回大会予稿集』：167-172.

新居田純野（2005）「存在動詞における「遠／近」「可視／不可視」―オーストロネシア語（サオ語）の場合―」『国文学解釈と鑑賞』1月号 至文堂：164-173.

新居田純野（2007a）「サオ語の文法研究」『石阿松氏『サオ語語彙4000』―仮名が記録した太平洋“危機言語”― 学習院大学東洋文化研究所調査報告（安部清哉・新居田純野編）：304-350.

新居田純野（2007b）「サオ語（台湾）における焦点接辞と二項述語階層」『他動性の通言語的研究』くろしお出版：67-78.

（中国語文献）

簡史朗・石阿松 編著（2001）『邵語読本』台湾：行政院文化建設委員会

黃美金（2000）『サオ語参考語法』（台湾南島語言4）台湾：遠流出版公司.

李方桂・陳奇祿・唐美君（1958）「サオ語記略」『国立台湾大学考古人類学刊』7: 137-166.

（英語文献）

- Blust, Robert (1998) Some problems in Thao phonology. In: Shuanfan Huang (ed.) *Selected papers from the Second International Symposium on Language in Taiwan*, 1–20. Taipei: Crane.
- Blust, Robert (2003) *Thao Dictionary*. Taiwan: Institute of Linguistics Academia Sinica.
- Li, Paul Jen-kuei (1976) Thao Phonology. *Bulletin of the Institute of History and Philology, Academia Sinica* 47. 2: 219–244
- Wang, Shan-Shan (2004) An ergative view of Thao syntax. Unpublished doctoral dissertation. University of Hawaii.

## 注

- 1) サオ族は南島の一族と分類されている台湾原住民であり、2001年に、台湾政府（行政院）は、サオ族を台湾における「第十番目の原住民」として公式に認定した。現在の人口は600人余りである。また、サオ語を自由に話す人の年齢も高齢層が多く、サオ語は消滅の危機に瀕しているとも言われている。現在では、日常生活に使用する言語は、主に台湾語と中国語である。そして、サオ語はサオ族同士の会話の中に時々使用される程度である。
  - 2) ここで用いるサオ語の表記は、子音は /p/, /b/, /m/, /f/, /t/, /d/, /n/, /th/ [θ] (Blust (2003) の表記は /c/, /s/, /z/ [ð], /h/ [ɬ], /l/, /r/, /sh/ [ʃ], /k/, /ng/ [ŋ] (Blust (2003) の表記は /g/, /q/, /ʔ/ [glottal stop], /h/, /y/, /w/ である。母音は /a, u, i/ の三つだが、/i/ は /q, r/ と連続するとき [e] [æ] [ɛ] などに、/u/ は /q, r, ng/ と連続するとき [o] となる。/b, d/ の前と、語頭・語尾の母音は glottal stop が現れるが、本稿では表記を省略した。Blust (2003) からの引用用例に関しては、本稿ではすべて筆者の採用している表記に統一してある。アクセントは、基本的には後ろから二番目の音節にくる。
- また、本稿で使用する略記号は以下の通りである。AF actor focus (シテ焦点)；CAUS causative (使役)；LF locative focus (バシヨ焦点)；PF patient focus (ウケテ焦点)；PST past (過去)；RED reduplication (繰り返し)；1 1人称；2 2人称；完 完了接辞；起 起動接辞；主 主格；助 助辞；状 状態接辞；接 接続詞；属 属格；存 存在動詞；対 対格；単 単数；動 動作接辞；場 場所接辞；移 移動接辞；非 非実現；複 複数；包 包括形；未 未来接辞；連 連結詞；RICIP 相互態接辞。
- 3) i-nay, i-say, i-suy, i-tusi が動詞であることは、過去を表す接辞 -in- がついて過去のことを、また、非実現の a が共起して未来をあらわせることからいえる。Wang (2004) では、Plain Intransitive Locative verb として扱っているものである。

- (1) kahiwan      in-i-tusi      Lalu  
昔      指示動詞—PST      ラルー島  
昔、ラルー島にいました。(過去)
- (2) in-i-nay      yaku      Barawbaw, mug-qca mu-tusi      Qariwan (Blust2003: 637)  
指示動詞—PST    1 単主      徳化社    引越し    あそこ—移    埔里  
I lived in Te-hua village (and then) moved to Pu-li.  
(以前徳化社にいましたが、埔里に引っ越しました。(過去))
- (3) yaku      a      i-suhuy      wazaqan      maniza  
1 単主    非      指示動詞    湖      釣りをする  
私はあそこにある湖で釣りをするつもりです。(未来)
- 4) Lalu 島は、日月潭の中央に位置する、かつてサオ族の人々が住んでいた島である。現在は日

月潭の水面が上がってしまったため、とても小さな島になっているが、観光客が必ず立ち寄る観光の場所にもなっている。

5) Blust (2003) から引用した用例には、英文の後に日本語訳が括弧の中につけてあるが、訳は筆者による。

6) ここの①から⑦までの用例は、荒井智子氏（大葉大学応用日語系）との共同調査（2003年5月、6月）で収集したものである。用例の文字化は新居田による。

7) 文脈指示に関しては、指すものが話の現場ではなく、すでに話題になった人やものや場所についての発話、あるいは、談話やテキストの中に出てくるものを参考にその傾向を調べた。

8) 以下括弧内は、省略されて発話される。

(1) A: tilha yaku lhmazawan mapa-riqaz Ali (あの人) ma-qitan a thaw  
昨日 私 はじめて 会った—RICIP アリ きれいな—状 連 人  
昨日、アリさんに 初めて 会いました。あの人は きれいな人ですね。

Q: ua. (あの人) ma-thuaw ma-qitan a thaw  
はい とても—状 きれいな—状 連 人  
そうですね。あの人は とても きれいな人ですね。

(2) yaku mu-tusi Qariwan. (そこで) f-in-ariw haya wa tamuhun  
私 あそこ—移 埔里 買う—PST この 連 ぼうし  
私は 埔里へ 行きました。そこで このぼうしを 買いました。

【付記】本稿は、次の研究成果の一部である。学習院大学人文科学研究所 2007-08 年度共同研究プロジェクト「危機言語・サオ語（台湾中部）の音声記録と記述的研究」（代表者、安部清哉（学習院大学）、研究分担者・長嶋善郎（学習院大学）・新居田純野（台湾・大葉大学））

## ENGLISH SUMMARY

### Demonstrative Expressions in the Thao Language of Taiwan

Sumino NIIDA

This paper discusses research on demonstrative expressions in the Thao language. Thao is the language of the native Thao people residing in Taiwan's central region and belongs to the Austronesian family of languages.

The determinant in choosing a demonstrative expression in deixis of the Thao language comprises the distinction of visible and invisible and the perspective of the speaker.

The Thao language has three kinds of demonstratives: demonstrative determiner, demonstrative pronouns, and deictic verbs. The meaning and the function of the demonstrative expression in deixis was analyzed and systematized by classifying speech samples. These were collected from informants taking into consideration their perspectives and the distinctions between visible and invisible elements.

*Key Words:* the Thao language, demonstrative, deixis, perspective, visible and invisible